

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。



京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・

「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

京都 保津峡

亀岡フィールドステーション

ちいきの大切なものってなんだろう？

京都大学東南アジア研究所 河原林 洋

2012年9月15日～17日、「京筏組」と京都大学東南アジア研究所、京都学園大学の協働で、「ちいきの大切なものってなんだろう？～歴史・文化・自然でまちおこし～」と題した一連のプログラムが行われた。これは、各地域の自然、歴史、文化を題材に地域おこしなどを行っている各団体から、「ちいきの大切なもの」をキーワードに地域活動の何たるかを学び、深めようとするプログラムである。

9月15日は、京筏組主催のイベント「いかだにのってみよう！！」が保津川河畔で行われた。保津川の伝統的な筏に試乗し、保津川の自然、歴史、文化を体感しようというイベントで、昨年を上回る約300人の参加者でにぎわった。私は筏試乗会の実質的なリーダーとして準備、実施を統括した。

筏に使った材木は、南丹市日吉町で伐採した間伐材70本で、約1ヶ月前に亀岡市文化資料館に搬入し、保津川下りの船頭衆と共に約10日間かけて皮むきを行った。かつては伐った直後に皮むきしたため剥きやすかったようだが、



写真1 いかにのってみよう！！

搬入された材木は伐り捨て間伐の材も入っており、虫がつき、皮も乾燥して剥ぐのに難儀した。また、剥いた皮は、街中で処理することも難儀である。山で皮をむけばそのまま自然に還るし、かつては屋根材にも使われた。今では他人の土地に捨てればごみ、不法投棄である。やはり材木はその土地で処理されることが適当であろう。

また、筏組みのための藤蔓と榎の木の採取も保津川流域で行った。最近、同じ場所ばかりで採取しているせいか藤蔓の採取にも苦勞するようになった。元筏士の方々も遠くは大阪府豊能郡能勢町まで採取に出かけたそうで、藤蔓は当時からも貴重な山の産物であったことがわかる。

このように、今回もオール丹波産で筏が組めた。丹波の自然の恩恵に感謝する。そして地域が育んだ伝統技術で筏を組み流す。筏は丹波、保津川流域の自然、歴史、文化の結晶といえる。

今回、今春開校した京都府立林業大学校の学生が授業

の一環として参加した。これは、同大学の先生が元京筏組の一員だったことで実現したものである。一緒に筏を組み流し、保津川筏の伝統技術を肌で感じてもらったであろう。また、京都学園大学の学生も多く参加してくれた。このように、京筏組の活動は、途絶えつつあった伝統技術を今の世に伝える一翼を担っている。

前日に降った夕立のため、会場には多くの漂着ごみが堆積していた。私は開会の挨拶で、今の保津川の現状と、保津川と流域の人々との関係性の二つについて話した。かつて物流の大動脈として活躍した保津川が、今は濁流やごみを垂れ流すだけの川と化している。筏は流域のつながりの象徴であり、この現状をみんなで考えるきっかけがこの筏イベントであると。しかし、上記のことをただ口や文字で伝えても、私たちの伝えたいことの半分も伝わらない。保津川は、「物流」としての価値は失われたかもしれないが、「人の交流」という新たな価値を与えることで新たな姿へと変わっていくのではないかと考えている。子供の頃に、保津川で人と出会い、仲間をつくり、保津川とともに遊び、楽しむ。この行為が、保津川を大切に思う気持ちへとつながっていくのではないかと期待している。

9月16日は、亀岡市役所市民ホールでシンポジウムが行われた。京都大学の安藤和雄の基調講演に始まり、国内外13名の研究者や地域活動家が各地の地域づくりの発表を行った。

安藤は基調講演で「地域再生とは亀岡の文明、日本文明¹を再構築していく営みである」と述べた。そのような活動が各人から発表され、有意義なシンポジウムとなった。参加者の中には、「初めてシンポジウムで居眠りしませんでした。大変面白かったです」との感想を寄せてくれる人もいた。

各地域で各地域の特性・個性を生かしなが活動している姿に私も刺激をうけた。このような催しが開催できたのも「ひとのつながり」があってこそであった。私にとって大切なものは「ひとのつながり」であると再認識した2日間であった。

[1] 安藤は「文明とは都市や農村という枠組みが本質ではなく、自然や生き物との関係にも及ぶ持続的で長時間かけてつくられてきた生活総体」と定義付けている。



写真2 ちいきの大切なものってなんだろう？

第24回もやいフォーラム開催 コモンズの基層を考える ―土地に刻まれた物語群とそこに住む人たち― 研究員 嶋田奈穂子

守山F Sの協力機関であるNPO 法人平和環境もやいネットでは、9月17日、第24回もやいフォーラムを開催した。テーマは「コモンズの基層」。同法人副理事長の高谷好一先生が話題提供された。

「コモンズ」とは、英語の「commons」からの外来語で、日本の伝統的な共有システムである「入会」や、その空間の英訳である。「入会」は地域によって呼び名が異なる上、内容も多様であるため、外来語の「コモンズ」がそれらの総称として多用されている。もともと「commons」は、中世イギリスで使われはじめ、農民が生活の糧の一部を得る空間、またはその権利を指していた。“この「コモンズ」という言葉には不快感がある”という言葉から、フォーラムは始まった。

高谷先生は、外来語の「コモンズ」と日本の「入会」とは、その基層において全く質の異なるものであると指摘する。その違いは、そこに「カミ」の存在を意識するかどうかだという。言い換えれば、そこに対する恐れや畏怖があるかどうかということ。先生は自身の集落の例を挙げながら次のように説明された。

「私の集落は野洲川に沿っている。川に沿って堤防がある。堤防の上には道があって片側は竹藪、反対側は松林。この下に集落がある。入会地はこの竹藪と松林。堤防は国有地だけど、ずっと昔からここは集落の100戸で分けて使っていた。集落の川もそう。みんなで川掃除して、メンテナンスしていた。誰のものでもない、集落のものやった。

この堤防の下に池が7つあった。湧水池で、親池と呼んでいた。地下に竹で作ったパイプを通して、一つの親池から10数戸ずつに配水していた。この親池も入会地。誰のものでもない、池仲間のもの。パイプがどこかで詰まったら、池仲間で修理もした。しかし、この池は怖かった。水が冷たいので、入ったら吸い込まれそうで怖かった。こういう怖いものが、集落にはある。神社がそう。1haほどの杜があって、2人の神様が祀られている。それからこの杜にある木。昔、その木には五寸釘が打ち付

けてあった。誰かが夜中に打ち付けていたんや。これも共有やな。それから墓。墓は昔、堤防に付いていたらしい。昔は墓で死人を焼いていた。墓ももちろん入会地。だけど同時に、堤防や墓は異界でもあった。

他方でラオスのような例もある。ラオス南部はここ400年ほどでラオ族に開拓された土地。ラオ族の村には、プーターと呼ばれる村の鎮守の杜がある。ここには、ラオ族が入植する以前からこの地に住んでいた先住民を祭っている。そしてラオは、この村の土地を自分たちのものとは考えていない。プーターから借りて、住まわせてもらっているだけ、使わせてもらっているだけだと思っている。土地はプーターのもの。カミサマのもの。日本の入会の基層にあるものも、これだと思う。こういう入会を、本当に『コモンズ』で訳せるか？ 分け合うだけの入会か？ 利用するだけの入会か？ 入会とは、人間だけが分け合っているいいようなものではない。ここで変な事したらバチが当たる、怖い！ 日本の『共有』とは、カミを怖れる意識と共にあった。」

日本の「入会」の核になるのは、単に規則や制度ではないようである。その空間に棲む動物、虫、そして様々なものに宿るカミ等、全てが共有の輪の中に含まれており、それぞれに対する畏敬こそが核であったといってもいい。極めて奥行きのある世界である。高谷先生が「コモンズ」に対して持っていた不快感は、到底日本の「入会」の本質を表しきれないということなのだろう。そして先生の最後の言葉が印象的だったので、ここで紹介しておきたい。「日本における伝統的な『共有』は、畏れるということ。もう一つは、土地に刻まれた物語を共に持つということ。それは歴史を共有すること。都会では、そういうものがない。だから今、『コモンズ』という新しい物語を作っているのだろう。」



話題提供者の高谷先生（左）と議論する阿部健一先生（国際コモンズ学会事務総長）

小さな水力の大きな力

朽木 FS／火野山ひろば 島上宗子

2012年9月1日（土）、「小水力発電、さあ関西で！」と題した講演会と関西広域小水力利用推進協議会（以下、「協議会」）の設立総会が京都駅前の龍谷大学響都ホールで開かれた。4月14日に小水力発電をテーマとしたシンポジウム（本ニュースレター5月号参照）が開催されてから約半年。シンポの企画・準備に携わったメンバーを中心に「協議会」設立の準備が進められてきた。小水力利用への関心の急速な高まりを反映してか、講演会には、会場が満席となる360名あまりの人々が集った。講演会後に開かれた設立総会には、当日入会した人々も含めて計177名が出

席し、関西2府4県と福井県、三重県を対象に小水力利用の推進を支援する「協議会」が設立された。

「協議会」は、小水力利用を進めることで、原子力や化石燃料に依存しない持続可能な社会づくりをめざすとともに、「自然に生かされ、地域の歴史やコミュニティを大切にする『足るを知る』社会への転換」をめざしている（「協議会」設立趣意書）。「足るを知る」。つまり、水のエネルギーをいただく一方で、エネルギーを“湯水のごとく”使う今の暮らしを見つめなおそうということだ。主な活動は、関西での小水力利



講演会には360名、設立総会には177名の人々が集まった。

用に関する情報発信や情報交換の場づくり、適地選定や採算性の検討など小水力利用を進める事業主体へのアドバイスなどだ。総会では、朽木 FS の黒田末寿さんが「協議会」会長に選出された。行政との連携が不可欠であることから、京都府知事、滋賀県知事らが顧問として名を連ねている。設立直後につくられた会員メーリングリストでは活発な情報交換がすでにはじまっている。

小水力の集まりに特徴的なのは、参加者の多様さだ。年配男性の比率が高いとはいえ、女性や若者も積極的な役割を果たしている。発電や水力の専門家もいれば、私のようにキロワットといわれてもまだピンとこない、電気の下素人もいる。関係者の多様さは、目指す小水力の規模にも表れていて、身近な水流を活かして発電装置を自分で作りたいという人から、今年の7月にスタートした「再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度」で採算があがる事業規模をめざすものまで様々だ。「協議会」は、あらゆる規模を対象とするが、基本的な立場として共有されたのが、「造る側」（人間）の都合だけではなく、「造られる側」（川と川に暮らす生き物）の視点を常に持ち続けること、そして、地元が主体となることだ。地元の人々が主体となりながら、技術者、NPO、企業、研究者、コンサルタントらといかに協働していけるのか。「ざいちのち」（在地の力、知恵）をキーワードに取り組んできた私たちにも共通する課題だ。

本や講演会で勉強するだけでは、小水力利用はなかなか実感として理解できない。実践の中で試行錯誤し、一つ一つ現場を訪ね、経験に学ぶ中で少しずつ感覚が養われてくるのだろう。「協議会」では毎月何らかの勉強会や現場視察などを企画している。関心のある方、まずはホームページを訪ねてみていただけたら、と思う（<http://kansai-water.net/>）。



総会の翌日（9月2日）、京都府南丹市美山町「芦生山の家」の小水力発電施設を見学。パイプで水をひき、6メートルあまりの落差を活用して13キロワットの出力。「山の家」の30%程度の電力を賄えるという。かつては、この場所に京都大学の水力発電設備があった。

表 規模別の小水力発電

発電規模	特徴・目的	事業規模の目安
数百 W 以下	街灯をつける程度。環境教育目的。	10 万円程度
1kW ～数 kW	家庭規模（1 世帯を賄う程度）。小水力発電の可能性を実験・実証し、プロモートする。	数百万円規模（手作りだより安くできる）
数 kW ～10 数 kW	既存施設の付随設備として建設。施設全体の維持管理に組み込む。政策的なプロモーション。視察観光。	数千万円規模
10 ～ 30kW	量産型の開発をめざす。量産して価格を下げる。農業用水路に設置するなど。	kW あたり 120 万円程度が目標。100 基で数十億円
30 ～ 70kW	初期費用の回収、維持管理が最も困難な規模。	0.5 ～ 2 億円
100kW 以上	売電事業規模。初期費用を回収し、事業として継続できる。収益を地域振興に活かす。	1 ～ 10 億円

出所：中島大（全国小水力利用推進協議会事務局長）講演内容から要約

催しのご案内

■第45回 定例研究会

1. 日時 2012年4月27日(金) 17:00～19:00
2. 場所 滋賀県守山市守山1丁目10番2号「うの家」
3. 4年間の実績を踏まえ今後の活動の継続の基盤をつくるために支援協会構想の内容について発表し、各FSが構築してきた社会再生モデルについて、各FSの立地の地

域性を踏まえて議論します。

4. 発表者 安藤和雄(京大東南アジア研究所)

★開催場所と開催時間が今月から変更になりました

★以上の催し物への参加ご希望の方は、
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当:安藤和雄(ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

ブータンで見た「よろずや」の品揃えと民家の造りについて

おおり医院勤務 東南アジア研究所特任研究員
分 部 敏

今年9月にブータンのシュルプツェ大学で開催された農村に関するワークショップに参加しました。東ブータンの中心地であるタシガンを訪れ、その町の店と農村の民家を見ました。

■ブータンのよろずや

東ブータンのタシガンという町に長く滞在しました。



ブータンの「よろずや」、各種の商品がそろっている

タシガンは、首都のある西ブータンとは文化的に違うツェンラ文化圏の中心にある都市です。

タシガンのバザールはホテルや店、事務所が並んでいる小さな繁華街です。バザールから続

く通りには8軒のジェネラル・ストアが並んでいました。日本では、「よろずや」あるいはコンビニエンスストアと言えます。1軒をのぞいてみると、品揃えは、野菜、菓子、飲み物、日用品の数々、衣類や布等々と、店の中に所狭しに並び、何でもそろっています。どの店も、品揃えは同じようなものでした。靴を売っている店もありましたが、基本商品は似たり寄ったりでした。酒屋も兼ねている店もありました。

この地域では、他の種類の店はあまり見かけませんでした。よろずやが店の基本形態になっているようです。

ひとつの店で、欲しい物がそろるのは便利でありがた

いと思いました。食材や日用品は決まりきった物を買うので、この程度の店で十分です。手間も時間もかかりません。日本だと、八百屋、魚屋・肉屋、雑貨屋などと各々



雑貨店、品揃えが豊富

の店をひと回りするか、あるいはスーパーマーケットの各売り場を回って、その後に列に並んで会計をします。

ひとつの疑問が湧いてきました。どの店も同じ品揃えなら、この町の人々は、一つの店で欲しいものをすべて買うのか、いくつかの店でそろえるのか。私が訪れた時は、客がいなくて店番は暇そうにしていたのでわかりませんでした。

■ブータンの民家

ワークショップの後、スタディ・ツアーに参加してタシガン県カリン村を訪れました。

調査中に、村の裕福な民家でお茶をいただきました。通された部屋はこざいにかたづいていて、私たち11人が座れる大きさの部屋でした。片隅にたたんだ毛布、織りかけの機織り機、壁には国王夫妻の写真が掲げられ、隅に冷蔵庫が置いてありました。また、ティーカップのたくさん入った食器棚があり、人を寄せるような家に見えました。

ミルクティーと、ウリ、トウモロコシを炒ってつぶした硬い素朴な菓子がふるまわれました。

しばらくして上からの熱さを感じました。見上げたところ天井が無いのに気がきました。屋根のトタンが見えました。ブータンの伝統的な建て方の家ではありませんでした。この家を離れるときに見たら、私たちが招かれたのは建て増しの部分でした。

ちょうど同じ村の寺で冷ややかな空気に触れたあとでしたので、室温の差を感じました。その寺には屋根裏に登る梯子があり、登ってみました。天井の上には土壁が塗ってありました。この地方の伝統的な家は、2階建造りで立派なものです。1階の壁はレンガを積み、2階は木の柱に土壁で、しっかりと天井があり、屋根はその上に載っています。窓枠は飾り窓になっています。屋根裏は吹き抜けで素通しになっていて、干草の置き場にもなるそうです。

この家の建て増し部分ですが、その土地にあった家屋の造りにしない理由はなぜでしょうか。伝統的な造りではお金もかかるでしょう。時代が進んで、他にも出費が増えていることもあるかも知れません。しかし、この造りは住みやすさを犠牲にしています。伝統的な家を作ることは、その優先度が下がっているのかも知れないと思いました。

新しく家を建てるさいには近所の人たちの助けを借りることがあると日本のテレビ番組で見たことがあります。近所との関係が変わってきているのかも知れません。また、涼しい家にするの優先度が下がってきているのかも知れません。いろいろと想像してみました。